

## 酢山さんと阿賀野患者会の関わり

記録：こうえんてい

編集校正：関礼子、谷内久美子

聞き取り場所：皆川邸

日付：2018年8月31日

### 【酢山省三さん】

1947（昭和22）年9月20日生まれ。出身地は静岡県浜松市。新潟大学卒業後、新潟民医連にて事務職として勤務。病院で水俣病の申請事務を行い、水俣病患者と関わる。64歳で退職。2007（平成19）年より阿賀野患者会事務局長を務める。



### 患者会に関わったきっかけ

1947（昭和22）年9月20日生まれ、今年で71歳です。私は患者ではありません。出身地は静岡県浜松市。浜松は名古屋に近いところです。大学は新潟大学で勉強して、卒業した後、病院で受付の仕事とか、事務一般をやりました。そこで、水俣病患者さんのことにかかわるようになりました。6年前に64歳で退職しました。ちょうどその頃、新潟水俣病の患者会を作ろうという話があって、事務局長をやってくれないかと言われ、引き受けました。11年前に患者会ができた時から、ずっと事務局長です。

私が勤めていた診療所は、水俣病の患者さんが頼りにしているところでしたから、医療の仕事を始めた時から、患者さんとお付き合いとか繋がりがありました。診療所では、多くの水俣病の患者さんが、診断を受けたり、治療したりしていました。

新潟水俣病被災者の会会長の近喜代一さんが亡くなったことも記憶しています。お医者さんの往診についていくと、囲炉裏で阿賀野の魚を焼いて、出してくれたものです。みなさんは川魚を食べたことがないかもしれませんね。阿賀野の川魚は、独特な臭みがあって、食べられなかった人もいました。

### 加害者は昭和電工だが、それを許した国にも責任がある

新潟水俣病は第二の水俣病ですね。熊本県水俣市のチッソ（熊本の水俣病の原因企業）が水銀を垂れ流しました。そこで、昭和30年代に水俣病が発生し、水俣市から水俣病という名前が付きまして。その時、国が全国の水銀を用いている工場を調査したのですが、何も対応しなかった。ちゃんと水俣病の発生を防ぐ施策を実行していたら、第二の水俣病は発生しませんでした。あるいは発生したとしても、こんなに被害は大きくならなかったと思います。国は、その時、見て見ぬ振りしたということです。だから、新潟水俣病の加害者は、直接的には水銀をきちんと処理せずに川に流した昭和電工ですが、それを許した国にも責任があるということです。

### 水俣病の診断を受けるということはどういうことか

水俣病は自分がそうなって欲しくない病気ですし、治らない病気ですから、そういう診断はショックです。先日も、患者会の役員をしている60代の男性の患者からそういう話を聞きました。その方は3年前に水俣病だと診断されたのですが、水俣病かもしれないと予想して診断所に行ったはずなのに、実際に水俣病だと診断されて、うちに帰る車の中で思わず涙が出たそうです。運転ができなくなるほど、涙が止まらなかったそうです。60代の親父がですよ。水俣病というのが世間でどう思われるのかを考えると、それほどのショックなことなんです。

## 患者会は患者同士が繋がる仲良しクラブ

阿賀野患者会ができたのはノーモア・ミナマタ第1次新潟全被害者救済訴訟（以下、ノーモア・ミナマタ新潟第1次訴訟）の前です。後に裁判の原告になる患者さんにとって、水俣病はよくわからない病気でした。しびれたり耳鳴りがしたり、いろいろなお医者さんにみてもらっても、年寄り病だとか言われて、薬を飲んでもダメだし、注射でもダメだ、よくなると悩んでいた人がほとんどです。そういう人たちのところに、沼垂診療所の関川智子先生から、「お宅のお父さんお母さんおじいちゃんおばあちゃんは水俣病患者として、認められていました。あなたも魚を食べれば、病気になった可能性があります。今度、診療所にそういう人たちが集まるから来ませんか」という内容の手紙が届きました。そういう人が関川先生のところに集まってきたのですが、どの人も、水俣病のことは聞いていませんでした。自分のお父さん、お母さん、おじいちゃん、おばあちゃんが水俣病にかかって補償を受けたなんてことを一度も聞いたことがなかったんです。私たちも、阿賀野川流域の一軒一軒にチラシを持って周りながら、痺れがある人は診療所に来ませんかと誘いました。そして、そんな人がどんどん集まってきて、水俣病の勉強会をすると、病気は自分の責任ではないですから、「やっぱりこのままじゃ納得いかない」ということになりました。

同じ水俣病の症状を持つ患者さんが横に繋がりがながら、みんなで元気を出して、頑張ってきたのが阿賀野患者会です。最初から裁判をやるために作ったということではありません。水俣病は世間からも忘れられたところもありました。みんなどうい状況かわからないので、患者会を作ろうということで、「じゃ、名前どうする？」という話になりました。「熊本では水俣病不知火患者会がある。不知火海から名前をとっている」「じゃ、私らは川だから、阿賀野患者会にしよう」ということで、名前が決まりました。患者会ができた当時はね、患者さんは47名しかいませんでした。2018（平成30）年の今年は11年目になりますが、現在は410名ぐらいの患者さんがいます。最初は水俣病の患者さんたち同士が繋がる「仲良しクラブ」として出発しました。

それからどんどん患者さんが増えてノーモア・ミナマタ新潟第1次訴訟では、171名が1年9ヶ月の裁判を闘い、全員が救済されました。その時に、「もう患者さんはいないだろう」と言われたんけれども、そうではなく、まだまだ患者さんがいたのです。それがわかって、2013（平成25）年から、ノーモア・ミナマタ新潟第2次訴訟を提訴して闘うことになりました。

## 原告団団長を皆川さんに、副団長を神田さんに頼んだ理由

ノーモア・ミナマタ新潟第1次訴訟が終わってからも、まだまだ患者が手を挙げて認定申請も続きました。弁護団とは、「もう一回裁判やらなきゃ」ということを話していました。裁判となれば、一次の原告団とは別の原告団をつくらなくてはいけないから、核になる原告団長を決めにゃいかんわけ。やっぱり団長の姿勢が、あるいは団長を支える副団長や原告団の幹部の姿勢が裁判全体に影響します。私は、原告団をつくるのであれば、皆川栄一さんしかいないと最初から思っていました。副団長の神田栄さんも地元で議員さんをやったりしたから、書くのも、お喋りするの、本当に見事なものなんですけど、皆川さんには強い気持ちがありました。皆川さんは、もともとは大工さんだから決して喋るのがうまいわけじゃありません。でも、「なんで水俣病の被害を被ることになったのか」という、怒りみたいなものがあつたんです。それは表にワツと出るわけじゃない。新潟県人らしく抑えた感じですが、やっぱり「許せないぞ」という気持ちが、言葉の端々に出るわけですね。団長とか副団長は、最初に嫌だと言っても何とかなると考えていました。もう皆川さんしかないと。やっぱり皆川さんの気持ちですよね。頑張るといふ気持ちが、私からみれば一番大きかった人なんです。裁判になれば原告団の団長は皆川さんだと、皆川さんをお願いしました。断れなかったと思います。

皆川さんが団長を引き受けて頑張っていただけたというのは、神田さんとか原告幹部の存在もありますが、一番の大きい功労者は奥さんなんです。奥さんも原告です。非常に明るい感じの奥さんで、この奥さんの明るさが皆川さんを支えてくれました。

## 事務局長をやっている原動力

人間の性格って、いろいろありますよね。私は喜怒哀楽が激しいタイプです。新潟の人は、自分の思い、感情をあんまり表に出せない人が多いですね。県民性や風土もありますけれど、私は静岡県浜松市の出身ですし感情的に激しい性格です。水俣病に関わって許せないことがいっぱいあります。

新潟水俣病の原因は昭和電工という会社です。戦前から発電所を作って、そこで生まれた電気で工場を作り、昭和電工は水銀をきちんと処理しないで川に流しました。死に至らしめる水銀をです。国も知っていたけれども、会社の利益のために目をつむりました。それは、やっぱり許せない。会社の利益のために、事実を蓋をして被害者を出し、しかも被害者は黙らせてきたということは、許せない気持ちが強いですね。

患者は「俺は川魚を食べて、症状が出て、関川先生から診断を受けたけれども、申請しても、認められなかった。では、この病気は何なんだ？」というわけです。患者さんは二セ患者とかいろいろ言われて、「このような思いはこれ以上したくない」というわけです。やっぱりそういう患者さんの思いに触れたり聞いたりすると、このような思いはこれ以上させたくないなあと思います。

正義感かもしれません。誤ったことは許せない。水俣病の問題には、仕事半分、ボランティア半分で関わっていますが、他のことでも、「なんで広島、長崎に原爆の被害を受けた日本の政府が核廃絶のために、頑張ってくれないのか」、「なんで、アメリカとかや中国もそうだけど、日本が人類のために核兵器をなくそうという核兵器禁止条約に批准してないのか」と。どうみても、おかしいでしょう。人間は人間として生きていくために、その不合理なことに対して、言うべきことは言わなくてはならないという気持ちがあります。

でも、水俣病の問題はあくまでも患者さんたちが主人公です。そこが不十分にならないように、フォローする役割が私にはあります。患者さん自身が、自分の思いを表に出せるように手伝うのが私の仕事だと思います。

### 「水俣病ではないと診断して欲しかった」

阿賀野患者会の運動に関わってきた中で、印象に残る患者さんが何人もいます。

補償申請をするにはいろいろな手続きが必要です。まず、診断所に行って、関川先生の丁寧な診察を受けて、水俣病かどうかの診断をしてもらうのに2時間くらいかかります。水俣病の診断が下されると、治らない病気だと言われているし、世間からは偏見があるしと、いろいろありました。ショックですね。それでも、痺れや耳鳴り、味がわからん、色がわからん、いろいろな症状があるのに病名が定まらない、じゃあ、なんなんだと、やっぱり自分の病気を知りたいわけです。それで、川魚を食べたから水俣病の疑いがあると周りに言われて、診療所の関川先生のところに来たわけです。

私の仕事は、関川先生が書いてくださった診断書を患者さんに渡すことでした。患者さんは診断書を役場に持っていくと、水俣病の認定申請をすることができます。水俣病の患者として認められれば、日本の法律に基づいて、補償が受けられます。あるいは、被害者手帳を貰えます。申請には最低限診断書が必要です。そのために、みんな診断を受けます。患者さんに診断書を渡す時に「よかったですね。これで補償の申請ができますよ」というと、多くの患者さんは「ありがとうございます。申請します」と喜んでくれました。

ところが、ある日、50代か60代のご婦人でした。「役場に行って、申請してくださいね」と診断書を渡したのだけれど、喜んでる様子はなさそうでした。心配でしたから、後になって電話して、「どうでしたか」と聞きました。



すると、役場には診断書を持っていないと言います。「どうしてなのでしょう」といろいろ聞いたら、「実は診断書もらったんですけど、『水俣病ではありませんね』ということを確認してもらいたかった」と言うのですね。

それ以降、「よかったですね」とは言えなくなりました。いろいろな思いを持って、水俣病の疑いがある患者さんたちが診断を受けに来た。けれども、いざ水俣病の診断を受けると、ずっと水俣病の患者として生きていけないといけません。「よかったね」なんて言葉、その人にしてみれば受け入れられないことだったと気付きました。その患者さんに会ってからは、「よかったね」と言わないようにしています。ただ、仕事ですから、診断書を患者さんに渡して、役場の手続きをこうしたらいいですよというアドバイスや、お手伝いはしました。

### 歌を作ったり占いをしてくれたMさん

3、4年前に亡くなったMさんも印象に残っている1人です、80歳を過ぎた人です。娘さんが1人いました。水俣病の診断を受けて、役場に申請したけども、申請してもなかなか認められませんでした。水俣病は10人が申請しても1人認められるかどうかというぐらいです。関川先生は頑張ってくれたけれど、患者さんも頭にくるわけです。「先生の診断をきいて、申請したんだけど認められなかった。そんならこの病気はなんなんだ」と。まだ私は退職前で職場にいたんだけど、私が認定かどうかを決めるわけではないのですが、Mさんは「なんでだめなんだ」と私に怒るわけです。怖かったね。

Mさんと、いろいろな話をしました。一人暮らしで、今は新潟市に住んでいるんだけど、生まれたところは違うということ。奥さんのこと。本人も水俣病のことを調べていて、結構仲よくなりました。Mさんの家にも行きました。アパートでね、いろいろなものが置いてありました。どうしてこんな生活になるのかという感じでした。都会の一人暮らしの老人の生活みたいな感じで、部屋もすえた匂いがしていました。残念ながら、裁判の途中で亡くなっちゃいました。一人娘に連絡して「裁判を引き継ぎませんか。遺族でもできるから」と誘ったけれど、「それはできません」と言われましたね。

水俣病の患者さんと付き合うということはその人の人生を無視できなくなっちゃうわけです。夫婦の問題とか、親子の問題とか、家庭の問題とか、地域の問題とかとか。辛いことが多いんですよ。Mさんは歌を作るのが好きだったね。占いも好きだったね。私の名前の字画をみて「幸運がいっぱいありますよ」と占いをしてくれてね。忘れられないじいちゃんでしたよ。

### 「こんなババでも力になれば、よければやりましょう」

90歳ぐらいのKさんというおばあちゃんも印象に残っています。ノーモア・ミナマタ新潟第1次訴訟の時の患者さんの話です。裁判では原告の数が力になります。弁護団は原告の人数を増やそうと頑張っていて、私のところにも協力の依頼が来ました。私と、もう1人の事務職員で、診療所に来る患者さんに声をかけました。普通の人、裁判という人生経験をしたことがないでしょう。国を訴え、昭和電工という石油業界で一番大きな企業との裁判です。最初は「裁判やったってだめだ」、みんなそう思っていました。でも、水俣病の診断を受けてきちんと補償をもらうには、裁判が一番いい方法なんです。裁判で勝つために100名以上の原告を集めようとしていました。私は、駄目でもともと、当時70歳ぐらいのおばあちゃんに、原告にならないかと声をかけたんですよ。そうしたらすぐに「仲間になります」と言ってくれて、裁判に参加してくれたんです。それは何より嬉しかったです。

Kさんは、ご主人も、診療所で私が関わっていた患者さんでした。裁判で和解を勝ち取った後、娘さんも診断を受けて、水俣病と認められました。何十年間も、苦しんできたわけです。そのまま人生に終わりたくないという気持ちがあったのでしょ。だから、私が裁判に出ないかと尋ねた時に、「こんなババでも力になれば、よければやりましょう」と言ってくれ、その後も本当に頑張ってくれました。

Kさんの人生も聞きました。お父さんもお母さんも、Kさんが子どもの頃に病気で亡くなったそうです。お父さんお母さんが亡くなって貧乏だから、子どもの頃から一番上のお兄ちゃんが一生懸命に苦労したのを見ていたわけ。そして、同じ集落の人に嫁入りしました。ご主人も患者さんで、寝たきりになりました。阿賀野川の近くの集落だから、舟に乗って、砂利舟で砂利や木材を運んだりする仕事をしていたそうです。Kさんも女だからと言って、家にいるわけじゃない、ご主人と一緒に船に乗って、そういう苦労をしながら子どもを育て、しかもこの病気で苦しんできました。このまま死ぬわけじゃないと思うもあったのでしょね。「100歳まで生きよう」と約束したんだけど、98

歳で亡くなりました。お葬式に行きました。娘さんも阿賀野患者会の患者さんですが、「おばあちゃんは大往生した。静かに生きてくれたね」と言われました。いろいろ水俣病で苦しめられたのだから、何かしないと生き直すことができなかったのじゃないのかと思います。

### もう二度と水俣病のような公害を出さないために

全国の公害病の患者さんたちが横に繋がる組織があります。水俣病は典型的な公害病の一つです。他にも、公害問題はたくさん存在しています。例えば、大気汚染。現在は中国でも問題になっているけれど、日本でもかつては大気汚染が大きな問題になっていました。工場から出る煙とか自動車の排気ガスが原因でした。2つの水俣病と、富山のイタイイタイ病、四日市公害という四大公害病時代がありました。企業が利益を得ると、国民の所得が上がっていき、給料が上がっていきます。その一方で、昭和電工やチッソが儲けを優先して水銀を適切に処理しなかったため、水俣病が生まれました。企業が利益を得るために被害を生み出すことは決してあってはならない。新潟水俣病の裁判をする一番の目的は、原告の人たち、被害者たちの救済ということです。もう二度と公害を起さないことが二番目の目的です。大気汚染も、決して完全にきれいになるわけではありませんから。今でも新しい基地、自衛隊の騒音とか原子力発電所の問題とかが起こっています。原発事故が起きてから相当経っていますけど、今現在、新潟にも2,000人近い福島からの被害者がいます。

公害は、国民が起こした害ではありません。国の施策が起こした害です。水俣病も大気汚染も原発も、企業の儲けのために起きた被害です。決して「公」の害ではありません。今後、どういう公害が起きるのがわからないけど、二度と公害が起きないように。

私らは、何も企業を壊すとか車を止めろということをやっているわけではありません。車であれば排気ガスを出ないこととか省エネ効率の良い車を増やすとか、あるいは企業もそこで働く労働者の賃金をきちんと保障して、周りに迷惑かけないような製品を作るといったことが大事だと思います。経営者にはそういうこときちんと考えてほしい。水俣病の闘いも、患者さんの救済だけではありません。国や川や空が安全できれいな環境を作るのが、日本でも、世界でも、一番大事じゃないですか。

### 水俣病における回復とは

新潟も、熊本もそうだけれども、水俣病という病気になった患者さんがいるわけです。生身の人間が水俣病に冒されたわけです。関川先生は、水俣病からの回復について質問された時、完治とまではいかないけれども、水俣病の治療方法が確立されて、病気の治療ができたり、症状が良くなるのが回復だと答えられていました。

確かに完治しないし治らない病気だけれども、それでも、熊本の水俣市に国立水俣病総合研究センターがあって、専門の先生がいて、10年以上も研究して、いくつかの成果が出てきています。熊本だけではなく、同じ水俣病を患っている患者さんがいるこの新潟で、治療を受けられるようにして来てくださいと、阿賀野患者会としてお願いしたり、発言したりしています。一番大事なことは水俣病の患者さんたちの体が少しでも良くなること。これが基本です。でも、それはなかなかできないこともあるので、同時に裁判を通して、水俣病患者であることを認めさせたい。謝罪を受け、補償を受ける。これは病気に関わらず、大事なことです。



それから、水俣病の問題を風化させないように、子どもたちに、水俣病という不幸な事件があったということ、もう起こしていけないということ、患者さんがどう頑張っていたのかを伝えたいです。加害者はどう償ったのか、医者はどう頑張ったのか、もっと若い人に伝えていきたいのです。その役割を、水俣病の資料館だけでなく、自分自身も担って、いろいろな形で伝えていかないといけない。まだ私の水俣病は終わらないと思います。裁判も含めて、もうちょっと頑張ります。利益だけを考え、被害に目

をつぶってはいけません。そういう考えは危険だと、日本だけでなく世界の若い人にも伝えたい。今から、70年以上前に、日本は、戦争したわけです。戦争はダメだということで、国連ができました。それでも、戦争が起きたし、今も、戦争の火種は残っています。水俣病を通して、同じ地球の人間が本当に安心できる国になるよう援助するというように、考えを広げていけますよね。

### 未来世代へのメッセージ

私には中学生や高校生の孫がいます。スマホをいじって、ちょっと行けばコンビニがあって、バイトでお金を稼いで、楽に過ごそうと思えば便利な世の中なんですよね。でも、今は停止中ですが、新潟の柏崎刈羽原発で作られた電気は東京に送電されてきました。再稼動に慎重だった知事さんが別の人に代わって、今また柏崎刈羽原発を再稼働しようという動きが出ています。日本がプラスチックとかビニールとかを使う社会に変わっていった時に、そのもととなるアセトアルデヒドを昭和電工では製造していました。そこに触媒として水銀が使われました。それがきちんと処理されないで川に流されたわけです。プラスチック製品ができて、生活が楽になりましたが、その陰には、水俣病患者のような被害者がいたわけです。スマホなんかの製品も東南アジアの安い労働力で造られています。ちょっと賢く考えると、便利の裏側にいろんな問題が見えてきます。

そんなこと考えなくたって生きていけるんだけれども、自分に直接関係がないことであっても、問題意識を持ったり、あるいはおかしいと疑問を持ってもらいたいですよね。そのためには賢くなって欲しい。新聞を読んでもらいたい。本を読んでもらいたい。学校だけでなく、社会人になってからも勉強してもらいたい。テレビとかネットとかスマホも便利だけれども、フェイストゥフェイスで話し合っ、人といろいろな意見を交わす、考えて続けてほしいですね。賢くなって、おかしいと思うなら、きちんと声を出して欲しいと思います。

私も水俣病の運動をしていくなかで、分からんことは分かるまで聞きます。難しいことを難しく話すのが弁護士さんだとしたら、それを分かりやすく翻訳して患者さんに伝えるのが私の仕事です。分かるまで聞かないと、私の仕事ができない。伝えるためには、難しい書類なんかも読まなきゃいかんわけだから、いつまでたっても勉強です。